

Requirement Development Alliance Summit 2005



要求開発宣言

OPENTHOLOGY

www.openthology.org

要求開発アライアンス設立準備委員

株式会社 豆蔵

山岸 耕二

正式に団体化

- 要求開発アライアンス
 - Requirement Development Alliance
 - 略称: ReDA :リーダ
- 趣旨
 - 企業のIT化に関わる共通問題の解決を図る
- 当面の活動
 - 「要求開発」の共通認識を図り、標準的な要求開発方法論Open Enterprise Methodology (Openthology)を策定する

本アライアンスのあらまし

- 2003年5月 ビジネスモデリング研究会として数名でスタート
 - ビジネスの可視化を目的
 - 要求開発の概念を策定
 - 要求開発プロセスと手法について策定開始
- 2004年10月 要求開発プロセスOpenthology ver 0.4をドラフトとしてアップ
 - メンバーからのフィードバックで洗練化
 - 口コミで30社以上80名の規模にメンバー数増加
- 2004年12月 集中討議合宿で、要求開発宣言採択
 - 団体化の設立準備委員会発足
- 2005年1月 ホームページ開設
 - Openthology ver. 0.6 をオープンドキュメントとして公開
- 2005年3月 要求開発アライアンス発足
 - 発足記念イベント 要求開発サミット開催

参加メンバー

- ユーザ企業、ベンダー企業、両サイドに属する変革意欲の高いメンバーが集うコミュニティ
 - 基本的には個人参加ベース、草の根的活動
- 一般会員
 - ユーザ企業の情報システム関係者
 - 銀行、電機、重工、建設、化学、公共、飲料
 - コンサル系ベンダー企業
 - プラットフォームベンダー企業
- 設立準備委員会
 - 安井、細川(日本総研)、平鍋(永和システムマネジメント)、依田(シナジー研究所)、河野(ウルシステムズ)、萩本(豆蔵)、山岸(豆蔵)

会員

- 基本的に個人参加
 - 会員資格は、既存会員の紹介、推薦による
 - 会費は無料(実費のみ負担)
- 主会員
 - ユーザ企業ならびにその情報系関連会社、または、これらの企業においてIT戦略策定、システム化企画策定に関わる個人
 - IT戦略策定、システム化企画策定に関わるベンダー企業に所属し、活動に貢献できる個人
- 推進会員
 - 問題提起、問題解決の方法論策定、会運営、イベント開催などにおいて、工数を割いて積極的に活動する個人

主な活動

- 標準的要求開発手法の確立
 - Open Enterprise Methodology (Openthology)
 - <http://www.openthology.org/> で広く発信
- 定例会メニュー（ほぼ月例、放課後実施）
 - Openthologyチュートリアル
 - 連続で開催。内容についての議論
 - 事例&フィードバック
 - 適用結果やメンバーの経験、意見を反映
 - ゲスト講演
 - モデリング手法、合意形成手法、業務分析手法
 - 投資効果評価、その他「要求開発」まわりの話題
- 反省会（定例会後に必ず開催）
 - 情報交換の場

Requirement Development Alliance Summit 2005



「要求開発」の背景



どうIT化すればいいかわからない

業務効率化をはかる一般企業



IT化投資額は、年間11.5兆円



どんなシステムを作れば、業務は効率化するのか？



結果の見えない
IT投資

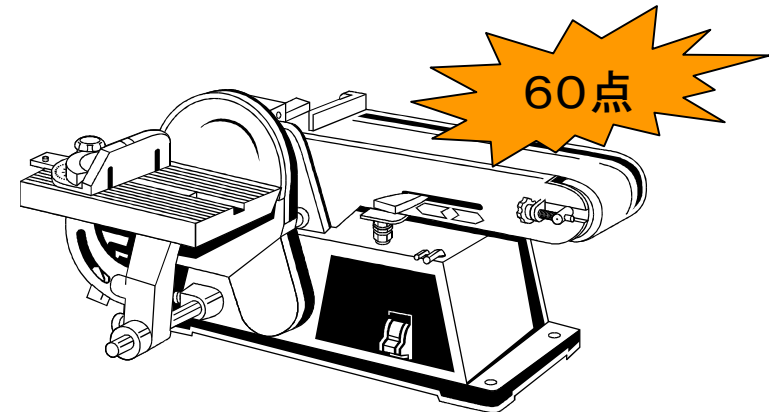
至るところに使えないシステムが……

ROIを高めるために

- 「システム開発」のコスト削減

➡ いかに効率よく作るか

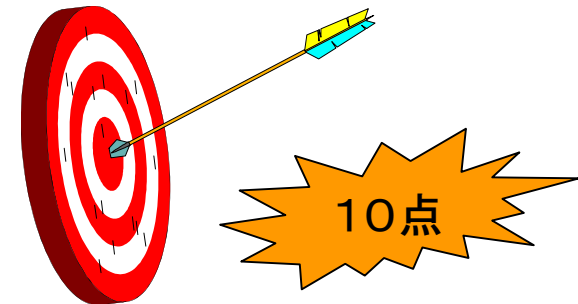
- システム開発プロセスの標準化
- 開発ツールの導入
- フレームワーク、コンポーネント再利用
- 低コストな労働力の利用(外注、オフショア開発)



- 経営課題解決に合致するシステムのプランニング

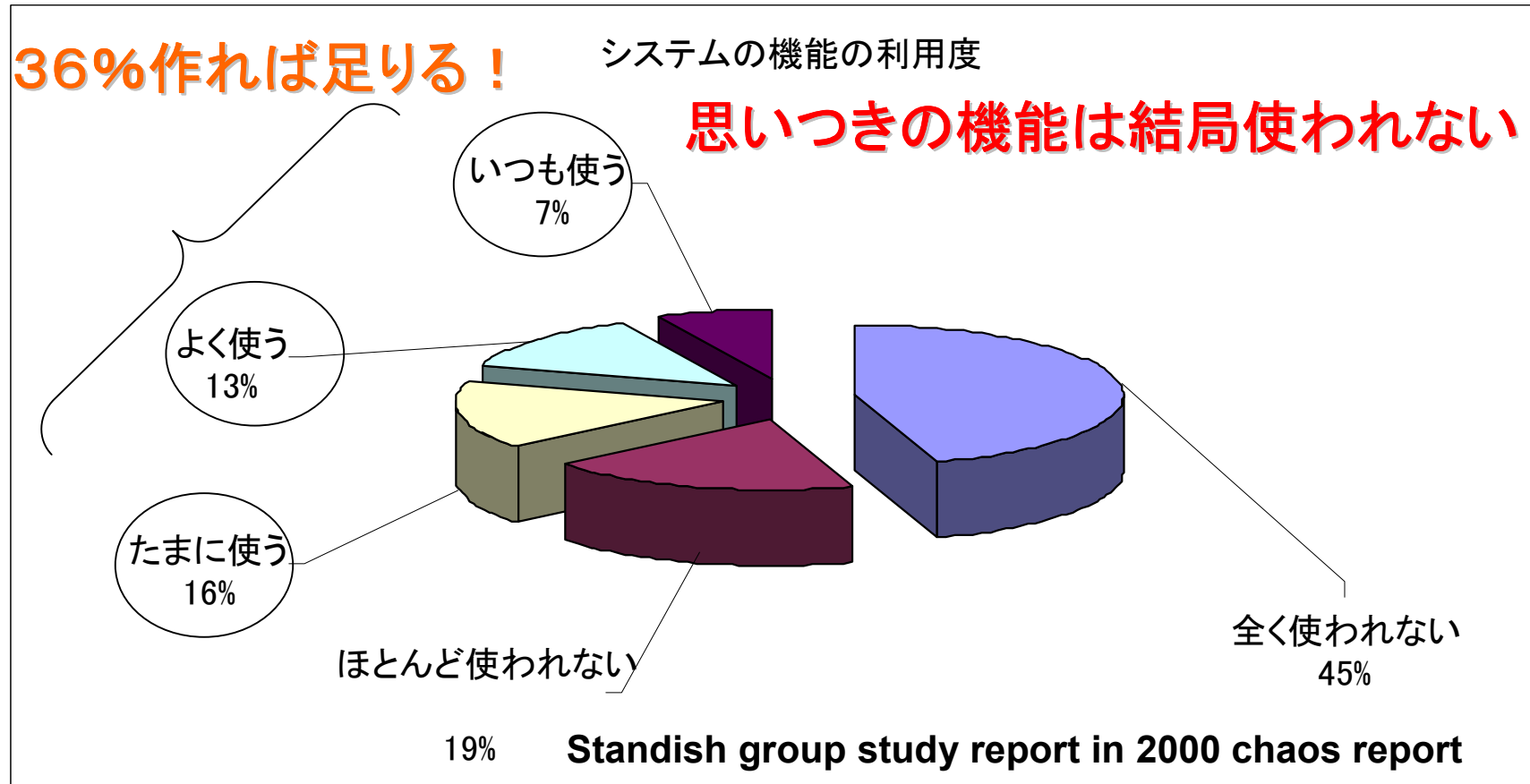
➡ 何を作るべきか

- 業務に合わせたシステム要求
- 適正なシステム化範囲
- 業務との整合性、トレーサビリティ



間違えたものを正しく作っても投資効果は得られない

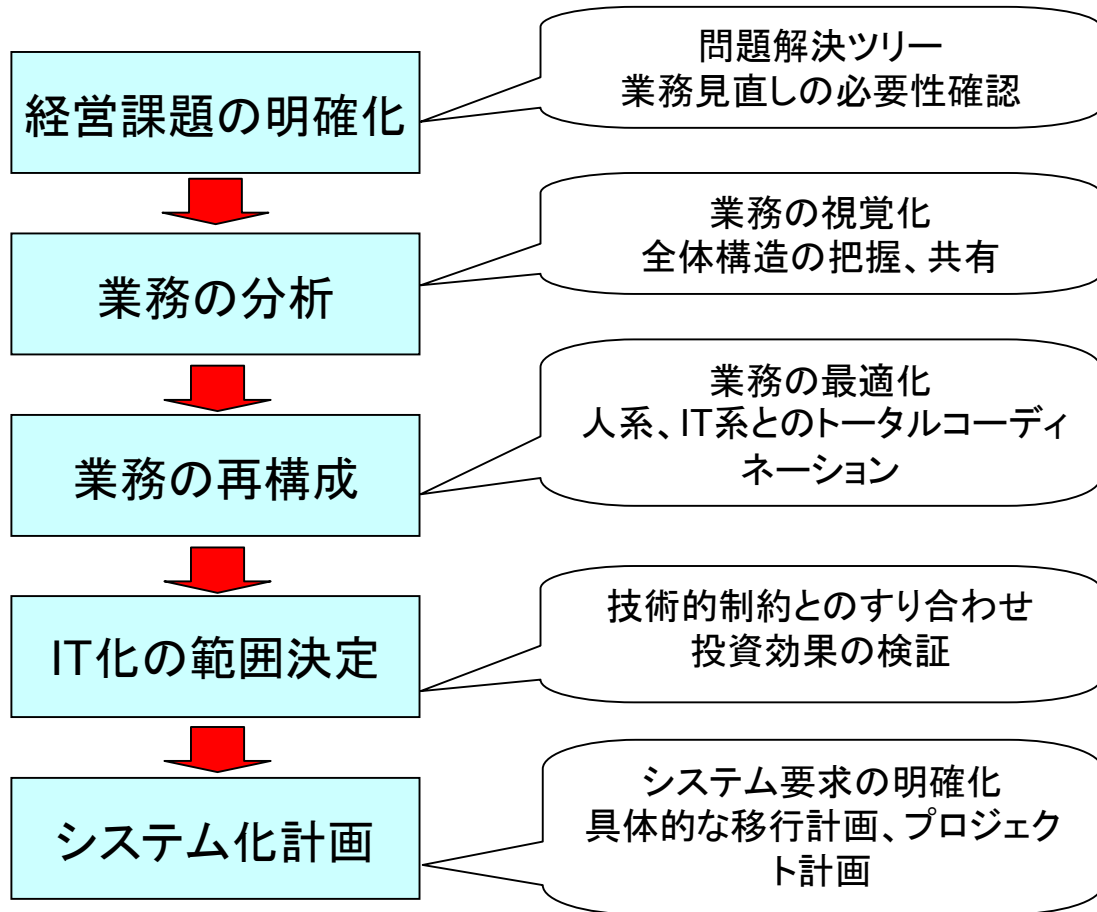
使えないシステムの使わない機能



要求は業務からロジカルに導かれなければならない

業務からロジカルにシステムの要求へ

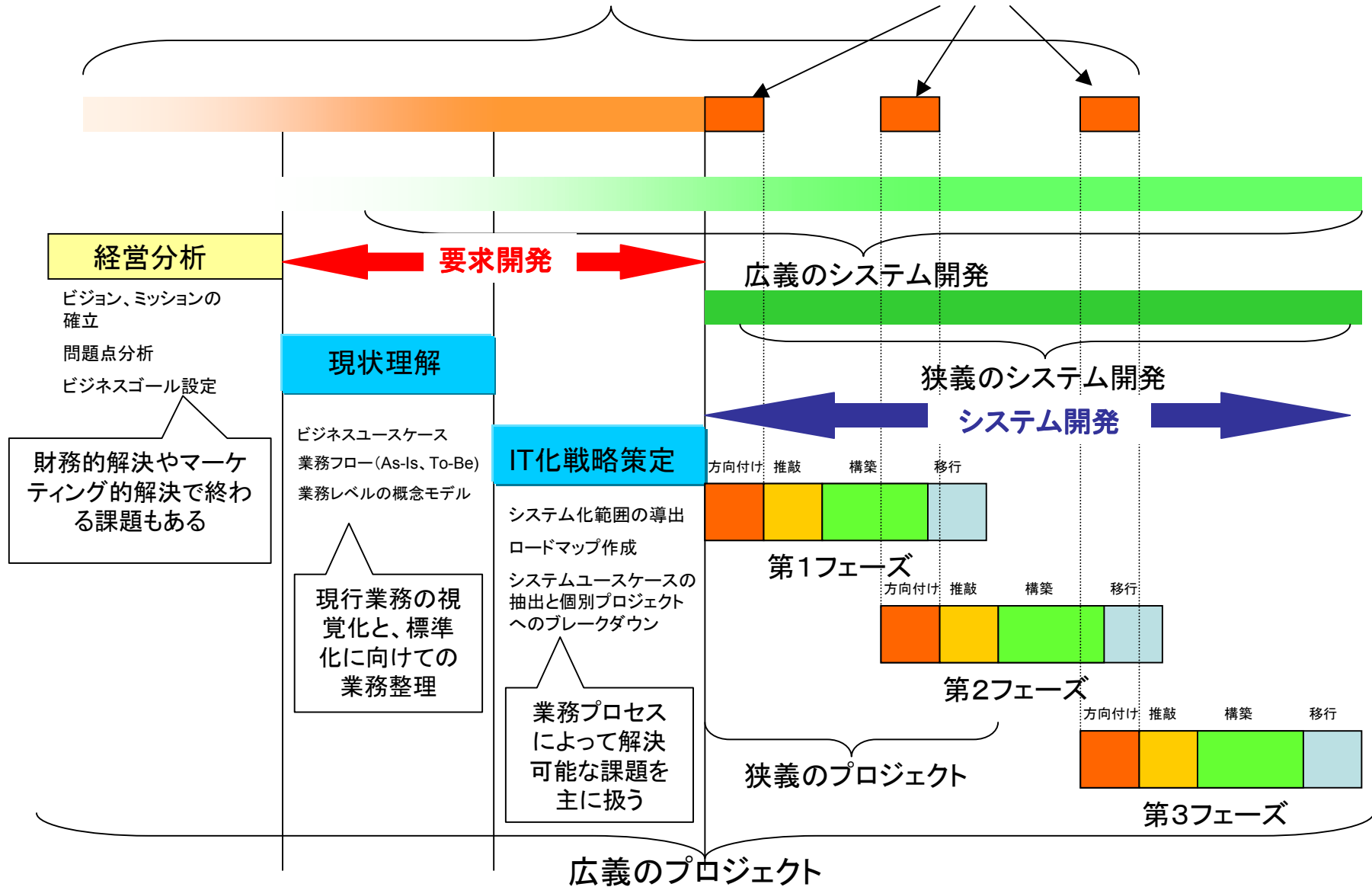
- 解決すべき経営課題の設定が基本
- 課題解決のために業務から見直す
- ITは業務の構成要素として、総合的に見直す
- 結果として、ITがなすべきところが決まる



プロジェクトの全体像と要求開発

広義の要求開発(要求定義)

狭義の要求定義

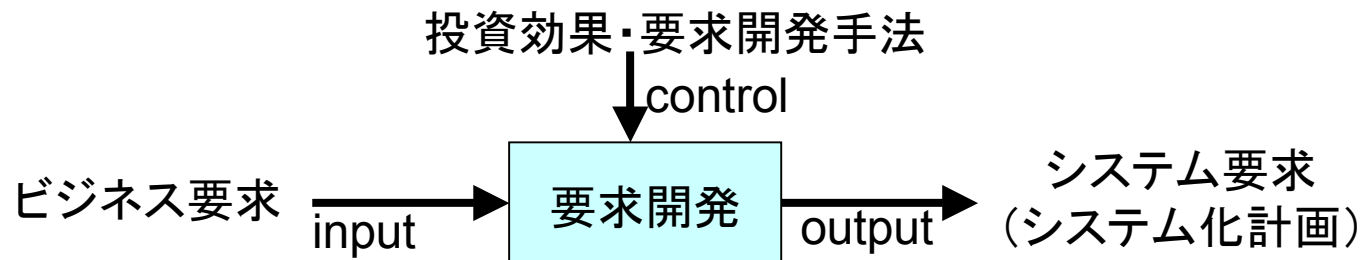


要求は「開発」するもの

- 「要求分析」、「要求定義」などは、要求がすでに存在しているという前提に立っている
- ユーザからヒアリングした要求の実現が業務効率化に結びつくとは限らない。
 - ユーザの理解の範囲内で生まれた属人的なもの
 - 直感的、場当たりのものであることが多い
- 要求は、業務を分析することによって開発される。ロジカルに導かれる必要がある。

要求開発とは

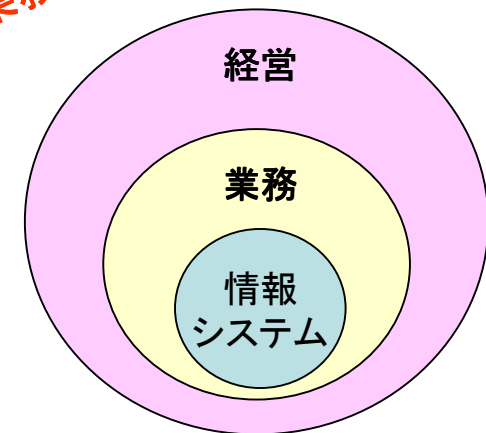
- ビジネス上の要求 (**ビジネス要求**) を元に、業務の設計、あるいは再設計を行う中で、情報システムが担うべき要求 (**システム要求**) を導き、定義する活動



- 業務構造の視覚化、業務分析、業務設計、IT化のスコープ決定、システム化計画立案などの作業を含む
- 要求開発のアウトプットが、後続のシステム開発プロジェクトのインプットとなる

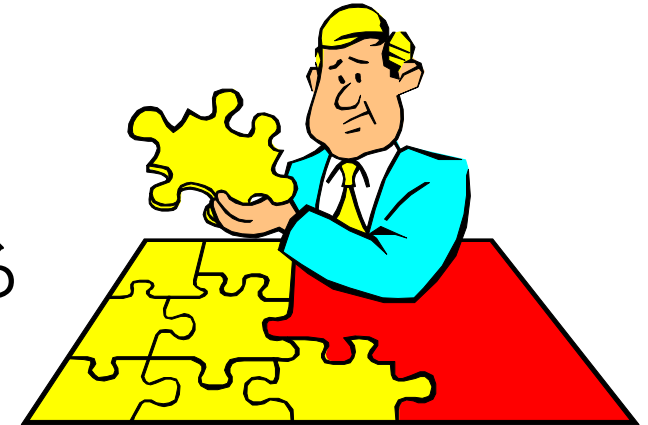
業務からITを導く

- 業務はトータルでコーディネートする
 - 業務は、人、組織、装置、設備、情報システム、パートナーなどが連携して実現される
 - 人間系と情報システムは互換性があるが、特性が違う(得意不得意がある)
 - 人間系の設計と情報システムの設計を片側ずつやっては最適化できない
- 上位目的(経営課題の解決)のために下位(業務、情報システム)を設計する
 - 業務の設計から生まれるITの設計
 - 業務の見直しから生まれる情報システムの見直し



業務の見える化(可視化)が要

- システム化対象は、より広範、より複雑に
 - SCM、企業・グループ統合、企業ポータル...
 - 全体の構造や流れが担当者の視野ではつかめない
 - 多くの立場のメンバーが関わっており、つなぎ合わせてみないと全体はわからない
- 見えれば最適化が進む
 - 立場の違うメンバーが同じものを見る
 - 共通部分が見える。標準化がはかれる
 - 上位で共通化するほど効果的
 - プログラムより設計、設計より業務
 - 共通化されるとシンプルで拡張性あるシステム
- システムの見える化と同期をとる
 - UMLで記述するとシステムに渡せる



ユーザ企業における要求開発

- 要求開発はすべての企業に必須
 - 情報化戦略は企業戦略の根幹を成す
 - 業務設計とIT設計は不可分
 - システム開発は比較的アウトソースが容易
- アウトソースブームで失ったITガバナンスを取り戻すために
 - 自社の業務プロセス、業務構造の全体図
 - 必要な情報システムを企画する能力
 - 業務とシステム要求のトレーサビリティの管理

要求開発宣言

- 情報システムに対する要求は、あらかじめ存在しているものではなく、ビジネス価値にもとづいて「開発」されるべきものである
- 情報システムは、それ単体ではなく、人間の業務活動と相互作用する一体化した業務プロセスとしてデザインされ、全体でビジネス価値の向上を目的とするべきである。
- 情報システムの存在意義は、ビジネス価値の定義から要求開発を経てシステム開発にいたる目的・手段連鎖の追跡可能性によって説明可能である。
- ビジネス価値を満たす要求は、直接・間接にその価値に関わるステークホルダー間の合意形成を通じてのみ創り出される。
- 要求の開発は、命令統制によらず参加協調による継続的改善プロセスを指向すべきである。
- 「ビジネスをモデルとして可視化する」ということが、合意形成、追跡可能性、説明可能性、および継続的改善にとって、決定的に重要である。

ご清聴ありがとうございました
今後にご期待下さい

